

かがやき

No.37(2018.3.5 刊行)、広報委員会編集
茨城県立図書館発行
禁複写転載©広報委員会

特別企画 図書館利用者の視点

企画にあたり

広報グループ 桜井 淳

図書館の利用者の大部分は、目的とする本を借りているが、その他にも、音楽のCDや映像のDVDも借りている。県立図書館のルールに拠れば、一度に、二週間の期限で、本10冊とCDやDVDを五つ借りられる。私は、東日本大震災以降、被災にかかわる新刊本を二週間に5冊のペースで、数年間も借り続けた。きついことであったが、仕事のために続けた。

私は、県立図書館で、意外な体験をしたことがある。水戸芸術館の初代館長の吉田秀和氏の全書22冊を読み、ページの手触りから、まったくの新品であることに気づいた。吉田氏は、日本の音楽評論の方法論を作り上げた日本を代表する音楽評論家であった。しかし、その分野に関心を持っているひとは、意外なほど少ない。県立図書館には誰にも読まれていない本が存在す

る。

さらに読者が少ないのはオペラ(operaはイタリア語のopus「仕事」の複数形)の本である。それらは地下一階の閉架の棚で眠っており、いつ来るとも知れない読者を待っている。

オペラの発祥地は、16世紀のイタリアのフィレンツェであり、上流階級の娯楽であった。ミュージカルはオペラが下地になっている。両者は、似ていることもあるが、本質的には、まったく異なる。オペラは、クラシックの生演奏に合わせ、他の分野にはない独特の発声方法で歌う。迫力が桁違いに大きく、しかも、キレが鋭い。

県立図書館地下一階の閉架の棚には、どのようなオペラの本が眠っているのか、欧州各国でオペラを鑑賞してきた山本俊弘氏に、その一部を解説していただいた。

そのような内容の朗読を対面朗読ボランティアに希望する図書館利用者は現れるだろうか？新たな可能性を拓きたい。

県立図書館所蔵資料オペラ鑑賞法

元原研職員 山本俊弘

茨城県立図書館所蔵のオペラ関連本(と言っても、いずれも開架図書ではなく、地下の書庫に埋設されている)をネタにして、オペラ鑑賞法について論じてみたい。

『帝王から音楽マフィアまで』
(石井宏著、学習研究社、2000)

日本にオペラがいかに浸透していない

かという顕著なエピソードが紹介されている。とあるイタリアの小さな町の首長さんは、規模は小さいながらも、それなりの音を出すオーケストラと歌手がそろっているオペラハウスが自慢である。親日家の彼は、わが町のように小さいながらもオペラハウスが自慢の日本の自治体と姉妹都市になりたいと思っていた。ところが、当然のことながら、日本にはオペラハウスがひとつもなかったのである（いまでは、オペラが上演出来るように設計されたホールがいくつかある）。そもそも、いわゆるクラシックと呼ばれる欧州で発生した音楽ジャンルは、交響曲のような器楽曲が起源ではなく、オペラや宗教曲が起源である。交響曲、すなわち、**symphony** も、バロックオペラの序曲 **sinphonia** から分離独立したものである。オーケストラという言葉自体、舞台と客席の間の平土間のことである。現在は、地理的概念は、含意していないが、舞台の上で演奏している管弦楽団は、本来、オーケストラとは呼べないのである。

『クラシック道場入門』
(玉木正之著、小学館、1997)
『オペラ道場入門』
(玉木正之著、小学館、2000)

これらの本では、シューベルト、ベートーベン、ブラームス、ブルックナーといったドイツ系の作曲者からなる器楽中心の音楽が、クラシック音楽の保守本流であるという図式が日本で出来上がった原因が分析されている。明治の文明開化の時代に、

日本は、学問、文化を、欽定憲法のドイツから輸入した。音楽もヴェルディのオペラ全盛のイタリアあるいはグランドオペラのフランスではなく、器楽中心のドイツの音楽を保守本流として受け入れた経緯があった。旧制高校で、アインス、ツヴァイ、ドライなどと気取ってかけ声をかけていたのは、その名残である。登山用語の多くがドイツ語なのもしかり。シューベルト、ベートーベン、シューマンといった作曲家をオペラ作曲家だと認識しているひとは、ほとんどいないであろう。事実、ベートーベンのオペラは、ただひとつしかなく(それもベートーベンにしては駄作という見方が大勢)、ブラームス、ブルックナーに至っては、ゼロである。

このように、日本ではなじみが薄いオペラであるが、著者によれば、一度その魅力にはまれば、高齢化社会で死んで灰になるまで、有意義な人生が送れるそうである。

私は、日本人の多くがオペラを毛嫌いするのをよく知っている(もちろん熱心なファンもたくさんいるが)、人前で不用意にオペラなど口にするなどないが、ここに書く機会を頂いたので、如何にしたらファンや通になれるかを書いてみたい。まず、オペラに関連した映画を観ること。

『アマデウス』(DVD)が
県立図書館で視聴可

数え切れない楽曲を作曲したモーツァルトであるが、何と言っても、真骨頂は、オペラである。この映画では、モーツァルトの

オペラの一場面をつまみ食いのではあるが、その魅力を存分に知らしめてくれる素晴らしい映画である。映画の中の、オペラ「後宮からの脱身」では「どんな責め苦・・・」という超有名なアリアが歌われる。超絶技巧が要求されるコロラトゥーラ唱法のアリアを聴けば、我々が普段聞き慣れている歌唱とは異次元のオペラの魅力に引き込まれること間違いない。

「フィガロの結婚」の終盤では、浮気をくり返す伯爵が夫人に謝罪し、夫人がそれを諾とする場面が映画に登場する。これを観て、誰もが、伯爵は、決して浮気は止めないだろうと思うのだが、その音楽は、どこまでも限りなく美しく真実を伝えているとしか思えない。映画のサリエリの台詞を引用するなら「神がこの男(モーツァルト)を通じて天上から世界に歌いかけていた」。

「ドン・ジョヴァンニ」では、終幕で、女たらしの放蕩貴族が、かつて殺害した騎士長の亡霊によって、怒濤のような音楽の渦とともに地獄に引き込まれる。映画でのこの場面の演出は、モーツァルトの在世時は、もちろん、実際のオペラでもないような過剰な舞台演出が見物である。

モーツァルト最後のオペラ「魔笛」では、またもや、超絶技巧のコロラトゥーラ・ソプラノの「夜の女王のアリア」が歌われる。人間の声の限界を超えている。映画中でオペラに費やす時間は、ごく、わずかであるが、いずれのオペラも通しで観たくなる気にさせられる。

「歌劇王カルーソー」(The Great Caruso)

二十世紀前半の世界最高のテノール歌手エンリコ・カルーソー(後半は、いうまでもなくルチアーノ・パヴァロッチィ)の生涯を描いた映画である。

残念ながら、この映画の映像ソフトは、日本では販売されておらず、海外から取り寄せる必要がある。世界最高のテノール歌手を演じるには、それに匹敵する実力が要求されるが、マリオ・ランツァが、それを見事に歌い、演じている。ベルカント(美しい声の意)唱法と呼ばれるイタリアオペラの名人芸的な歌唱法の魅力に引き込まれる大変面白い映画である。

どのオペラを観れば良いか？

オペラ誕生以来、数え切れないオペラが作曲され上演されてきたが、何を観れば良いか。以下、自分なりの嗜好で選んだ作品を紹介する。

「カヴァレリア・ルスティカーナ」 マスカーニ作曲

オペラは長くて退屈だというひとでもなんとか我慢できる約1時間の1幕オペラである。1幕なのは、マスカーニが1幕の懸賞オペラで1等を獲得した作品だからである。途中の心洗われる美しい旋律の間奏曲は、CMにも使われる有名な曲である。しかし、最大の見せ場は、自分を捨てた元彼に復縁を懇願する女(それも

かなりしつこい) と、それを断固拒絶する男との間にくり広げられる壮絶な修羅場である。映画や芝居では、表現不可能な過剰なまでの感情の迸りが、オーケストラ演奏と歌唱とによって、何倍にも増幅されて、見るひとに迫ってくる。複数の人間が、別々の言葉と感情で同時に喋れば、単なる雑音にしかならないが、オペラでは、これが、ひとつの芸術的な表現手段となる。オペラでしか表現できない感情の爆発に圧倒される。

「アラベラ」リヒャルト・シュトラウス作曲第1幕の、主人公アラベラとその弟(実は妹)との二重唱を聴いた時、この二重唱を聴かずして美を語ることはできないと感じた作品である。なお、作曲者のシュトラウス自身が、「これ以上いいものは作れない」としたのは、この作品ではなく、晩年の「カプリッチョ」だそうである。

「トロヴァトーレ」ヴェルディ作曲ヴェルディの数多の名作から、なぜ、「トロヴァトーレ」なのか。もし、母親の目の前で自分の子供が焼け死ぬのを見たら、その狂乱は、もはや言葉では表現できないであろう。これをオペラで表現するとどうなるか。自分の仇の子供を焼き殺したと思ったら、自分の横にいるのはその仇の子供で、実は、自分の子供を焼き殺してしまったという恐ろしい過去を回想し、その狂気を音楽で表現する場面は、このオペラの白眉である。

「マクベス」ヴェルディ作曲

シェークスピアの戯曲のオペラ化したもので、第1幕では、マクベスがスコッ

トランド王を殺害する。ここで、大合唱とともに、オーケストラの大音響が炸裂する。もはや、戯曲をもはるかに超越して、人間の邪悪な行いが、天地をも崩壊させてしまうというスケールの大きなメッセージが伝えられる。この場面は、映像ソフトではなく、ダイナミックレンジの大きい劇場で観れば、より強烈な印象を受ける。

以上、ごくわずかな本の紹介をただけだが、少しでもオペラに興味を持っていたければ幸甚である。

編集後記

特別企画の内容に絡めて、きわめて初歩的な考察を試みてみます。

日本の伝統芸能には、能、狂言、浄瑠璃、歌舞伎などがあります。昔、能と狂言と浄瑠璃は、武士や上流階級の趣味の世界でしたが、歌舞伎は、河原に小屋を建て、そこで演じられたため(役者は河原乞食と揶揄された)、庶民の趣味の世界でした。いまでは、それらは、すべて、隔たりなく、一定割合、国民に普及しているものの、全人口に占める割合は、決して、多いとは言えません。

過去半世紀、オペラを下地にしたミュージカルも普及しました。米テレビ番組の影響を受け、日本でも良く似た番組が放映されました。米国では、1960年前後に、ミュージカル映画「南太平洋」(1959)や「ウェストサイド物語」(1961)、「サウンド・オブ・ミュージック」(1965)が製作され、

世界的にヒットしました。日本でも、舞台で、「キャッツ」「ライオンキング」などが演じられ、ファンを獲得しました。しかし、観客は、決して多いとは言えません。クラシック演奏会も同様な発展経緯をたどりました。最も厳しい環境に置かれているのは、オペラであり、日本では、いまだに、専用施設や人材も限られ、社会に普及しているとは言えません。

オペラが好き日本人は、そのために、わざわざ、イタリアやオーストリアやフランスなどに出かけます。正装して気分を高め、会場に入ります。本当にオペラが好きな日本人は、海外旅行や海外出張の途中、気楽に、オペラ劇場に足を向けます。日本と違い、なぜ、気楽に入場できるかと言えば、日本と欧州各国では、入場料に雲泥の差があり、欧州各国では、政府が支援金を出しているため、日本の十分の一で、コーヒーとケーキ代くらいであるためです。そのようなことは、オペラだけでなく、クラシック演奏会や美術展でも同様です。

日本と欧州各国では、文化に対する考え方が異なり、欧州各国、特に、フランスでは、政府が支援金を提供して文化人や芸術家を育成しています。なぜ、世界から、フランスに芸術家などが集まるかと言えば、才能さえあれば、政府の支援金を獲得でき、パリで、2-3年、修行できるためです。日本にはそのような芸術家育成制度はありません。

日本では、クラシック演奏家や画家として自立するのは、大変です。意図している人達の数パーセントも自立できていません。大部分の人達は、それだけでは、生計が成り立たず、音楽や美術の教師、あるいは、

塾講師として、生計を立てています。それでは、ごく普通の感性しか磨かれず、世界に通用するオリジナリティが高くてワイルドな作品は、生まれません。

私が音楽家の息子を持つ原研研究者に実施した聞き取り調査に拠れば、日本有数のオーケストラ(orchestra)の30歳前後の奏者でも、経済的には自立できず、親からの仕送りでやりくりしています。私が実施した水戸芸術館運営者への聞き取り調査に拠れば、水戸室内管弦楽団のひとり当たりの演奏料は、たとえ、一流の経歴と実績があっても、一回当たり数万円であり、年六回の演奏会でも、計約30万円です。欧米の一流の奏者よりも一桁も少ないのです。

そのようなことは、音楽家や画家だけではなく、小説家や評論家でも同様です。私が若い頃に小説家の野坂昭如氏に実施した聞き取り調査に拠れば、作家を名乗る人達の中で、経済的に自立できているのは、全体の数パーセントにすぎず、大部分の人達は、他に本業を持っています。たとえ、商業的に演出された直木賞や芥川賞を受賞した作家でさえも、定年まで、会社勤務していた例もあり、その分野だけで自立することの大変さが読み取れます。

日本には文化人が成長できる環境や社会制度は整っていません。日本では、たとえば、100年後でも、欧州各国並みのオペラの劇場と人材の厚さは、実現できていないでしょう。

桜井 淳